

# 永井陽子のリズム

公文書の起案をする時、  
普段の生活で使用する言



名古屋北労働基準監督署長 田中哲夫 25



葉とは少し違うので、用語や文体にぶれがないよう注意をしているところ  
です。

昭和時代の起案文は、「新かな文語体」の文章が多くありましたが、最近では「文語口語混合折衷体（文語体もどき）」がほとんどです。私は、趣味で文芸関係の執筆をすることがありますが、「旧かな文語体」作品を期待する依頼もあり、三つの文体の使い分けに苦慮することとなります。

しかし、どの場合でも共通して意識していることがあります。それは、読者がいかにリズムミカルに「読む」ことができるかということです。

先日亡くなられた作詞家のまどみちおの詩はまさにリズム・しらべそのものでした。「どうさん」「やぎさんゆうびん」「い

ちねんせいになつたら」など、曲名を聞いただけで歌が口遊め、心が穏やかになります。まさに内容よりリズムが生命だという一例です。この「リズム」ということに関連して、短歌の話を書かせていただきます。

文化の街名古屋は、あ



れ、平成12年に死去しました。歌集に『ふしぎな楽器』、『モーツァルトの電話帳』、『小さなヴァイオリンが欲しくて』などがあり、その名のとおり、音楽をモチーフとした作品が多くあります。昭和46年、『太陽の朝餉』で角川短歌賞候補となり、歌壇にデビュー。平成6年4月から愛知芸術文化センターに勤務し、翌年4月より愛知文教女子短期大学助教授に就任しています。名北の空の下を実際に歩いたものと思います。

永井陽子の歌は、言葉の音律性で勝負しています。短歌は、「題材」が大事だと、今でも理解されていますが、その逆の作歌方法を提示したのです。『モーツァルトの電話帳』から歌を引用してみましょう。

べくべからべくべかり  
べしべきべけれすずかけ  
並木来る鼓笛隊

半夏生 わたくしは今  
日頭上より雨かんむりを  
しづかにはづす

丈たかき斥候のやうな  
貌をしてf（フォルテ）  
が杉に凭れてゐるぞ

一首目は、古語の助動詞「べし」の活用形が折り込まれています。二首目では、漢字の部首が形象化されています。三首目では、音楽記号が用いられており記号短歌の走りとなりました。

「永井の歌は解説しようとする」と解釈がぐらぐら揺れるところがあり、得体の知れない不透明感がある」という紹介もあります。歌の意味を解釈してもよくわからないです。ただ、リズム・しらべにより鑑賞を楽しむというのが永井短歌の醍醐味です。一度、図書館などでお読みいただければ、心が安らぐこと請け合いです。

イラスト・伊藤栄章